

Buddhist ruins exploration record at silk road シルクロード仏教遺跡探訪記

14日目【2000年4月27日午後】

全37日間

この地で憧れの高僧に出会う〈武威〉前半



武威の街並み

ここ武威は小さな町である。武威から敦煌まで、龍首山(3616メートル)と祁連山(5547メートル)を各々盟主とする、両山脈の間に挟まれ、南東から北西へ1000キロも続く、幅数10～100キロメートル、平均標高1500メートルの狭い廊下のような地帯、ここを河西回廊という。砂漠の中にオアシスが点在する、いわゆるシルクロードのメインルートである。

紀元前1世紀の頃、漢の武帝はこの河西回廊を保持するために、武威・酒泉・張掖・敦煌の四都を置き、万里の長城と烽火台を楼蘭まで伸ばした。田舎町とはいえ、武威には二千年もの歴史がある。

武威は、浄土真宗門徒に馴染みの深い仏説阿彌陀經を漢訳された、鳩摩羅什(344-413)が、長安に入る前17年間を過ごした地である。



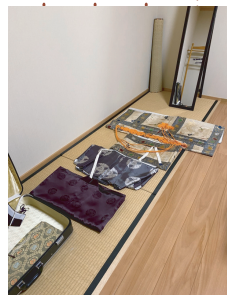
羅什寺塔の門前

昼から、鳩摩羅什を記念して建てられた、羅什寺塔に行った。十二層で高さ32メートルの塔は、鳩摩羅什の舌を埋めたところから下頭塔とも呼ばれている。また、ここは鳩摩羅什が經典を講じた場所である。



羅什寺塔

確かに、自宅での通夜・葬儀は大変です。駐車場の手配、近隣住民の方への配慮。四六時中、人が出入りされるので、当家の方は気が休まりません。通夜・葬儀は会館で勤まるとしても、臨終勤行(枕経)は、自宅の仏壇前での読経があり難く、最後のお別れとして、良き縁になると思います。



葬儀用衣(七条袈裟)に着替えます。



某葬儀会館の僧侶控室

臨終勤行は、故人にお経を届ける思いが強くなるのか、いつもより大きな声で読経されます。緊張感とは違った、張りつめた空気に、お香の煙りが漂い、良い香りに包まれ、故人を偲んだものです。

最近、病院・施設で亡くなられた後、自宅へ帰られることは少なくなり、直ぐに、葬儀会館へ向かわれるようになりました。

故人との最後の別れをされます。仏壇前で横になられた故人に向かい、「ありがとう」「世話になったね」「直ぐに私も参るからね」「お浄土であいましょう」と、最後の会話を交わされます。

勤まるのが当たり前でした。亡くなられたら、直ぐに寺へ一報され、自宅の仏壇前にて、臨終勤行(枕経)の読経。不謹慎かもしれませんが、この臨終勤行が良い雰囲気でありました。近所の方、ご縁のあった方が、普段着のまま、お念珠だけを手にして、

住職シター

Buddhist ruins exploration record at silk road シルクロード仏教遺跡探訪記

14日目【2000年4月27日午後】

全37日間

この地で憧れの高僧に出会う〈武威〉後半

インドの高僧である鳩摩羅什（サンスクリット名でクマーラジーバ）が、この場所で漢民族の言語を習得したことが、仏教經典の精神をとらえた漢訳を可能にした。仏教が中国をはじめ朝鮮や日本など、東アジア全域に広がる基礎となった。

このことを思い、1600年を経た今、同じ場所に立っていることを考えると、なんとも言えない感動と共に、心の震えを感じるような、熱い気持ちになった。

その後、文廟という甘肅省最大の孔子廟に行った。1439年（明代）創建で、東西135メートル、南北187メートルの敷地内に、建物が東西二列に並んでいた。観光者は私一人で、静寂の中をゆっくり見て歩くことが出来た。



夜食べた屋台のシシカバ



孔子の像



孔子廟内の大雲寺

今日は、タクシーを使わず、全て歩いて回った。それほど、ここ武威は小さな町である。ホテルに帰り、今朝、お願いした列車のチケットを取りに行った。

明日の朝にはここを発ち、次の都市、張掖を目指す。

今回は軟座が取れず、硬座になったが、元気に旅立つとする。

今後の法要スケジュール

「宗祖聖人月忌・

門信徒祥月命日法要」(善教寺本堂)

十一月 十六日(日曜日)

午後一時半

*毎月十六日に本堂において勤めております。

「報恩講」(善教寺本堂)

十二月 二日(火曜日)

午前十時 朝席

午後一時半 昼席

午後三時半 法要終了

講師 吉盛大智師(黒瀬町西教寺)

*お接待当番 武士地区

「除夜会」(善教寺鐘楼堂)

十二月三十一日(水曜日)

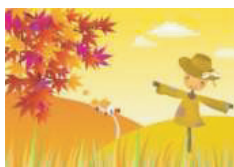
午後十一時四十五分

*鐘楼堂にて除夜の鐘を撞きます。

「元旦会」(善教寺本堂)

一月 一日(木曜日)

午前七時



ご縁に感謝

善教寺ホームページ『縁』<http://otera.or.jp/>

メール zenkyo@otera.or.jp